

[朝鮮の美術展によせて]

り がん か よう ず
李巖筆「架鷹図」について

表題の作品(図1、2、3)が今回の展観に特別出品されますので、ここでその作品について簡単に解説させていただきます。なお、李巖は李朝前期の代表的画家として有名ですが、この人物については美のたより67号(昭和59年5月)に「李朝前期の動物画家、李巖について」という題目で小文を載せています。そこでは李巖の経歴や現存作品についてふれていますので、これはその続きのようなものです。

本図は縦が97.0センチ、横は53.8センチの絹本着色で、掛幅装になっています。画面中央に身体はやや右斜め向きで、顔を左真横にして止木に立つ一羽の鷹が描かれています。円く大きな目、鋭い嘴や端正な羽毛、鋭く大きな爪をもつ足など、いかにもよく鍛えられた狩猟用の鷹の精悍な様子が活写されています。本図の止木は、我国に多く伝えられている舶載画の鷹図(図6)にみられるような柱状ではなく、地面に突き立てた柱状で、その先端は布で包んだ半球形の台座に仕上がっています。鷹の両足はともに鮮やかな朱色の組紐で結わえられ、止木に繋がっていますが、その紐には留金や房が付いており、豪華な装飾のある

止木と合わせて、この鷹が貴人の愛玩するものであることを示しています。

鷹図は朝鮮でも鷹狩に関わって、貴人好みの画題として古くから描かれてきたようです。その作例として李朝第三代の太宗(在位1400~1418)が従兄の完山府院君李天祐に賞として与えた白鷹・蒼鷹の二図がありました。それらは既に失われていますが、幸いにそれを1747年に模写した図(図4)が伝えられています。模写図は図4で御判かりのように、本図と同様、柱状の止木にとまった姿で描かれています。二図とも鷹は真横で表わされています。この図も李巖の画と同じく背景が一切描かれていないことが一つの特徴です。

その他、朝鮮の鷹図の遺例には、樹下の奇石に足を紐で繋がれた白鷹の図(李朝中期、図5)などもあります。17世紀以前のものも極めて少なく、名家李巖(1499~?)の筆になる本図はその点でも重要な作例といえます。ただ、李朝後末期になりますと画員の鄭弘来(1720~?)、金得臣(1754~1822)、李寿民(1783~1839)、張承業(1843~1897)などによって結構描かれています。鷹は海上に突き出た

④蒼鷹図
(韓国・個人蔵)⑤白鷹図
(幽斎斎コレクション)⑥白鷹図 伝徹宗筆
(島津家旧蔵)

岩に止まり、海の向こうから上る朝日と対した構図の「海鷹図」または「旭日豪鷹図」などと呼ばれるものや、樹上に宿る鷹として表わされています。即ち、鷹図も時代の推移によって、貴人の鷹狩用に飼育された鷹の雄姿を写したものから、山野を雄飛する野性の鷹のそれを捉えたものへとかわってしまったようです。

筆者の李巖は士人画家で、専ら犬や猫などの小動物を、花鳥を添景として描いて一家を成しましたが、本図の出現によってその作域に新しい一面を展開させました。と、申しますのは、李巖の真蹟六件(八図)は平壤美術館の「双雁図」を除けば他はすべて犬と猫が主題です。それら真筆八図にこの「架鷹図」が新しい画題の一幅として加えられたからです。

なお、ここで注目すべきことはこの「架鷹図」が我国の文献である「古画備考」に記載されている作品に該当するものと考えられることです。同書に見られる作品は、そこに捺された印三顆を筆写し、「架鷹図、常より細描也、此ノ三顆ノ印ヲ押ス、絹本着色、伝徹宗皇帝」と記してあります。ただ、この作品をすぐ本図と決めつけるには少々疑問があります。その一つは、本図には松堂主人の賛文が書かれているのに、同書ではそれに全くふれていないこと、もう一つは三顆の印章が本図では上から「琴軒」白文方印の順で押されていますが(図2)、同書では上から「杜城」、「琴軒」、「静仲」で順番が違い、

しかも「琴軒」印は明らかに別種のもので、あるいは本図の他に別作の「架鷹図」があったのかもしれない。なお、本図に押された「杜城」白文方印の遺例は他には無く、重要です。

本図の賛文(図3)は松堂主人こと朴英(1471~1540)による五言絶句で、以下の通りです。

閑刷新毛羽 當軒氣轉雄
會爲凡鳥畫 莫道一舉空
松堂主人題

普段はしずかに羽毛をきよめて、飛ぶに当たっては気を雄々しくして、道なき空を一挙に舞い上がる名鷹の雄姿を讃えた内容です。李巖の遺作中、図上に賛文のあるものは本図以外にありません。朴英は「海東名臣録」によれば讓寧大君禔の外孫で、字を子実、松堂と号した名臣です。成宗23年(1492)武科に登第し、以後様々の要職を歴任し、終の官位は慶尚左兵使でした。幼少より武芸に秀で、志操が異凡であり、更に医術に精通してその分野の書物も著すなど多才で、文章や書にも大変すぐれていました。朴英は李巖より28年長ですが、二人とも李朝宗室の出身です。名手、李巖のこのような精作に著賛していることから彼等には何か強い絆があったことが推測されます。この問題は今後の研究課題とさせていただきますが、これがあきらかになればこの作品の魅力も一層増すことでしょう。(吉田宏志)

①架鷹図 李巖筆
(龍星閣コレクション)

②同 印章



③同 朴英の賛文

